

忠度

古名

短冊忠度

世阿弥作

前

ワキ 旅僧

シテ 樵の翁

後

ワキ 前に同じ

シテ 薩摩守忠度

地は 摂津

季は 三月

「花をも憂しと捨つる身の。く。月にも雲は厭は
じ。」

「是は俊成の御内に在りし者にて候。さても俊成な
くなり給ひて後。かやうの姿となりて候。又西国
を見ず候ふ程に。此度思ひ立ち西国行脚と心ざし
候。」

「城南の離宮に趣き。都を隔つる山崎や。関戸の宿
は名のみして。泊りも果てぬ旅の習ひ。憂き身は

いつも交りの。塵の浮世の芥川。猪名の小篠を分
け過ぎて。

「月も宿かる昆陽の池。水底清く澄みなして。

「蘆の葉分の風の音。く。聞かじとするに憂き事
の。捨つる身までも有馬山。隠れかねたる世の中
の。憂きに心はあだ夢の。覚むる枕に鐘とほき。
難波は跡に鳴尾潟。沖浪遠き小舟かな。く。」

「実に世を渡る習ひとて。かく憂き業にもこりずま

の。汲まぬ時だに塩木を運べば。乾せども隙は馴衣の。浦山かけて須磨の海。

一声「海人の呼声ひまなきに。しばらく千鳥音ぞとほき。

サシ「そもく此須磨の浦と申すは。淋しき故に其名を得る。わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に。もしほたれつゝわぶと答へよ。実にや漁の海人小船。藻塩の煙松の風。いづれか淋しからずと云ふ事なき。

詞「又此須磨の山陰に一木の桜の候。是は或る人の亡き跡のしるしの木なり。殊更時しも春の花。手向の為に逆縁ながら。足引の山より帰る折ごとに。薪に花を折りそへて。手向をなして帰らん。く。如何に是なる老人。おことは此山賤にてましますか。

シテ詞「さん候此浦の海人にて候。

ワキ「海人ならば浦にこそ住むべきに。山ある方に通は

んをば。山人とこそいふべけれ。

シテ「そも海士人の汲む汐をば。焼かで其まゝ置き候ふ
べきか。

ワキ「実にくこれは理なり。藻塩たくなる夕煙。

シテ「絶間を遅しと塩木とる。

ワキ「道こそかはれ里ばなれの。

シテ「人音稀に須磨の浦。

ワキ「近き後の山里に。

シテ「柴といふ物の候へば。

地「柴といふ物の候へば。塩木の為めに通ひ来る。

シテ「余りに愚なる。御僧の御錠かなやな。

地「実にや須磨の浦。余の所にやかはるらん。夫れ花
につらきは。嶺の嵐や山おろしの。音をこそ厭ひ
しに。須磨の若木の桜は。海少しだにも隔てねば。
通ふ浦風に。山の桜も散る物を。

ワキ詞「如何に尉殿。はや日の暮れて候へば。一夜の宿を

御かし候へ。

シテ詞「うたてやな此花の陰ほどの御宿の候ふべきか。

ワキ「実にく是は花の宿なれどもさりながら。誰を主と定むべき。

シテ「行き暮れて木の下陰を宿とせば。花や今宵の主ならましと。詠めし人は此苔の下。痛はしや我等が様なる海人だにも。常は立ち寄り弔ひ申すに。御僧達はなど逆縁ながら弔ひ給はぬ。おろかにまし

ます人々かな。

ワキ「行き暮れて木の下陰を宿とせば。花や今宵の主ならましと。詠めし人は薩摩の守。

シテ「忠度と申し、人は。此一の谷の合戦に討たれぬ。ゆかりの人の植ゑ置きたる標の木にて候ふなり。

ワキ「こはそも不思議の値遇の縁。さしもさばかり俊成の。

シテ「和歌の友とて浅からぬ。

ワキ 「宿は今宵の。

シテ 「主の人。

地 「名も唯法の声聞きて。花の台に座し給へ。

シテ 「有難や今よりは。かく弔ひの声聞きて。仏果を得
んぞ嬉しき。

地 「不思議や今の老人の。手向の声を身に受けて。喜
ぶけしき見えたるは。何の故にてあるやらん。

シテ 「御僧に弔はれ申さんとて。これまで来れりと。

地 「夕の花の陰に寐て。夢の告をも待ち給へ。都へ言

づて申さんとて。花の陰に宿木の。行くかた知ら
ずなりにけり。く。(中人)

ワキ 詞 「先々都に帰りつゝ。定家に此事申さんと。

歌 「夕月早くかげろふの。く。おのが友よぶ村千鳥
の。跡見えぬ礧山の。夜の花に旅寐して。浦風ま
でも心して。春に聞けばや音すごき。須磨の関屋
の旅寐かな。く。

後ジテ

「恥かしや亡き跡に。姿を帰す夢の内。覚むる心はいにしへに。迷ふ雨夜の物語。申さん為めに魂魄に。うつりかはりて来りたり。さなきだに妄執多き娑婆なるに。何中々の千載集の。歌の品には入りたれども。勅勘の身の悲しさは。よみ人知らずと書かれし事。妄執の中の第一なり。されどもそれを撰じ給ひし。俊成さへ空しくなり給へば。御身は御内にありし人なれば。今の定家君に申し。

然るべくは作者を附けてたび給へと。夢物語申すに。須磨の浦風も心せよ。

地クリ

「実にや和歌の家に生れ。其道を嗜み。敷島の蔭に依つし事。人倫に於て専らなり。

ワキサシ

「中にも此忠度は。文武二道を受け給ひて。世上に眼高し。

地

「そもく後白河の院の御宇に。千載集を撰ばる。五条の三位俊成の卿。承つて之を撰ず。

下歌 「年は寿永の秋の頃。都を出でし時なれば。

上歌 「さも忙はしかりし身の。く。心の花か蘭菊の。

狐川より引き返し。俊成の家に行き。歌の望みを
嘆きしに。望み足りぬれば。又弓箭にたづさはり
て。西海の波の上。暫しと頼む須磨の浦。源氏の
住み所。平家の為めはよしなしと。知らざりける
ぞはかなき。

地 「さる程に一の谷の合戦。今はかうよと見えし程に。

皆々舟に取り乗つて。海上に浮ぶ。

シテ詞

「我も船に乗らんとて。汀の方に打ち出でしに後を
見れば。武蔵の国の住人に。岡部の六弥太忠澄と
名のつて。六七騎にて追つかけたり。是こそ望む
所よと思ひ。駒の手綱を引つかへせば。六弥太や
がてむずと組み。両馬が間にどうと落ち。彼六弥
太を取つておさへ。既に刀に手をかけしに。

地 「六弥太が郎等。御後より立ちまはり。上にましま

す忠度の。右の腕を打ち落せば。左の御手にて。
六弥太を取つて投げのけ。今は叶はじと思し召し
て。そのき給へ人々よ。西拝まんと宣ひて。光
明遍照十方世界。念仏衆生攝取不捨と宣ひし。
御声の下よりも。痛はしやあへなくも。六弥太
刀を抜き持ち。つひに御首を打ち落す。

シテ
「六弥太心に思ふやう。

地
「痛はしや彼人の。御死骸を見奉れば。其年もまだ

しき。長月頃の薄曇り。降りみ降らずみ定めなき。
時雨ぞ通ふ村紅葉の。錦の直垂は。たゞ世の常に
よもあらじ。如何さま是は公達の。御中にこそあ
るらめと。御名ゆかしき所に。簾を見れば不思議
やな。短冊を付けられたり。見れば旅宿の題をす
ゑ。行き暮れて木の下陰を宿とせば。

シテ
「花や今宵の主ならまし。忠度と書かれたり。

地
「さては疑ひ嵐の音に。聞えし薩摩の。守にてます

ぞ痛はしき。

地

「御身此花の。陰に立ち寄り給ひしを。かく物語申
さんとて。日を暮らしとゞめしなり。今は疑ひよ
もあらじ。花は根に帰るなり。我跡とひてたび給
へ。木陰を旅の宿とせば。花こそ主なりけれ。」

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第三輯』大和田建樹 著